

「お外、大好き！」な子を育む
～一緒に楽しむ2歳児の外あそびを考える～



社会福祉法人 愛護会

第二東水沢保育園

保育士 高橋 睦美

1 研究主題

「お外、大好き！」な子を育む
～一緒に楽しむ2歳児の外あそびを考える～

2 主題設定の理由

保育所保育指針の環境の内容には、「自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。」とあり、さらに解説の中に「近年、子どもは自然と触れ合う体験をする機会が乏しくなっています。子どもが全身を介して直接自然と触れ合う体験は、子どもの心を癒すだけでなく、自然に対する驚きの気持ちや、その美しさに感動する気持ちを子どもに抱かせ、その不思議さに魅せられる中で様々な気付きを得ていきます。（中略）保育士等は、園庭の自然環境を整備したり、散歩に出かけて自然と触れ合う機会を作ったりして、身近な動植物や自然事象に子どもが接する機会を多く持つようにしていくことが大切です。」とある。

しかし、ここ2～3年の自然環境も異常気象で5・6月に30度を超したり、1・2月にマイナス15度と低温になったりとひと月の間の気温の差も激しくなっている。保育園でもこの異常気象を考慮し、園児を園庭で遊ばせる際はタープや砂場にテントを設置し日陰を作ったり、温度計を持ち歩き気温が高くなり過ぎる時は水分補給や部屋に入れて熱中症にならないように配慮しているが、一昔前の子どもにくらべ、現代の子どもたちは外で遊ぶ機会が少なくなっているように感じている。

今年度2歳児クラスの担任となり、クラスの中で特に気になったのが、外に出たがらない子が多くいることだった。0、1歳児期は年齢も低いことから体力もなく、気温の差に対応できず体調を崩しやすい。そのため他の年齢に比べると、部屋での活動も多い。そんな0、1歳児期を過ごしてきたことも考慮したうえで、保育所保育指針に述べられている「動植物や土、砂、水や光それらを含めた野外の自然に触れて過ごしたり、遊びに取り入れたりすること」が2歳児の発達には大切と考え、クラスの子ども達に経験させたい、外で遊ぶことの楽しさを知らせたいとこのテーマを設定した。

3 研究のねらい

- 一人ひとりの個性を大切にし、外での興味あるあそび、好きなあそびを探りながら保育実践を行う中で、外あそびが好きな子を育む。

4 研究の仮説

- 関心を引くようなあそびを設定することで、外あそびへの興味をもたせられるのではないか。
- クラスの数人の子ども達が興味を持っている虫探しを広げることにより、外であそぶ楽しさを知らせることができるのではないか。

5 研究の内容と方法

- 季節や発達を考慮しながら、子どもたちの姿や興味関心に合わせ外あそびに関心を持てるような環境設定や言葉掛けについて考え実践する。
- クラスの数名の子ども達が関心をもっている外あそびを、他の子も興味をもてるようにするための手立てを考え実践する。

6 研究の実践

実践Ⅰ．風車

〈クラスの様子〉

進級し、新しい保育室に大喜びの子どもたち。保育室がわれんばかりの大きな声を出し、じっとしてられないとばかりに走り回っている。1歳児の保育室に比べ、2歳児の保育室が狭いため、1歳児の頃と同じような室内あそびはできない。そこで、十分に身体を動かし、大きな声を出してあそべるよう園庭あそびへと誘った。しかし、外であそんでいても、すぐ室内に入ろうとしたり、室内から出たがらない子が多かった。

〈保育者の対応〉

外だからこそ楽しむことができ、また、子ども達の関心を引くものと考え、1人一つずつ風車を用意した。目に見えない“風”を感じ、楽しみ

るような声がけを心がけた。

〈クラスの変化〉

風車をみせると『これ、なに?』と興味を持ち、保育者のそばに寄ってきた。風が吹きくるくると風車が回ると『わあー!』と手を叩いて喜ぶ。「かざぐるま”っていうんだよ」と教えながら、「一人、一個ね。」と、声をかけながら渡した。『ちょうだい。』『かして。』と次々に保育者に手を伸ばし風車をもらって行く。そして保育者の真似をして持ち、くるくると回ると歓声をあげ、嬉しそうに見つめている。ところが風がやむと風車も止まる。それを見て、腕を振り風車をまわそうとしている子もいた。そこで「風が吹くと回るんだよ」「ほら、吹いてきた」と風が吹くと風車が回ることを体感できるように声をかけ、知らせていった。「腕を伸ばしたらいいかも」「お山の上ならまわるかも」と風をもとめ、保育者と一緒に園庭のあちこちを歩いて楽しんだ。しかし、まだ保育者との信頼関係も薄く、また、集中力も短い年齢でもあり、すぐに飽きてしまう姿が多く見られた。

秋ごろに再度風車をだしてみると『あ!かざぐるまだ!』と大喜びで風車を持ち外に飛び出していった子ども達。土山の上でみんなで腕を伸ばし、『あ!かぜ!』と風が吹いてくるのを感じると、『まわった!』『みてみて!』と保育者に大喜びで教えてくれた。

〈考察〉

春はまだ信頼関係もきちんと築けていなかったこともあり、あそびは持続しなかったものの、視覚的に興味をひくものを準備したことで、外であそぶ楽しさも知ることができたのではないかと思う。低年齢児では、風が吹くと泣く子もいるが、風車であそんでいるときは風が吹くことを喜び、強い風ほど喜ぶ子もいた。

また、春にあそんだものを秋に出したことで子どもたちの様子も比較し、成長を感じることができた。



実践Ⅱ．虫探し

〈クラスの様子〉

朝、登園してくると元気に外に出て『むしさがし、しよう。』と保育者に声をかける子どもたち。プランターの下を一生懸命覗き込んで『このしたにいるかも。』保育者がプランターを持ち上げると『あ、いたいた。』『あり、いた。』と捕まえて見せにくる。虫探しが好きな子たちは毎朝、虫探しを楽しみに登園し、外に飛び出して行く。

そんな中、外に出たがらず保育室であそびたがる子が目に付いた。「一緒に虫探ししようよ」と友だちや保育者が誘ってもちらりと見るものの、また室内に入っていく。

〈保育者の対応〉

“自分の”という思いが虫への関心や満足感を高めるのではないかと考え、捕まえた虫を入れるものがほしいと思い、子どもたちの手に持ちやすいプリンカップを一人ひとりに用意した。

子どもたちが虫を捕まえた時には一緒に喜び、気付きや発見を丁寧に受け止め声をかけていくように心掛けた。関心がない子が少しでも興味をもてるように側で声をかけたり一緒に虫さがしを行うようにしたり、時にはクラス全体で活動することで関心が持てるようにしていきたいと考えた。

〈クラスの変化〉

虫を捕まえると『なにかにいれたい。』と言う子ども達にプリンカップを渡した。ミミズや、ダンゴ虫などいろんな虫を見つけてはプリンカップに入れ、保育者に『みて!』と持ってくる。「わーすごいね。」「ほんとだ、かわいいダンゴ虫だね。」と声をかけると嬉しそうに持ち歩いている。そのうち『ぼくのおおきい。』『こっちはちいさいね。』と友だちと見せ合う姿が見られるようになった。ある日、今まで虫を捕まえようとしなかったA子が『〇〇ちゃんにつかまえてもらった。』と、嬉しそうに見せに来てくれた。「よかったねー。」と一緒に喜ぶと、とても嬉しそうに他の保育者や友だちにも見せに行く姿が見られた。

時には『みつけられなかった。』としょんぼりしている子がいたが一緒に探してあげ、「明日、きっと見つけられる。また一緒に探そうね。」と期待を持てるように声をかけた。

〈考察〉

“自分で虫を見つけた”“自分で捕まえた”“自分もみんなのように虫を持っている”という気持ちは虫への関心を持てただけでなく、その気持ちを保育者に受け止めてもらったことで、自分の自信へとつながったように感じられた。それが保育者との信頼関係へとつながり、友だちとの関わりにも発展した。

虫が大好きになってきた子どもたち。虫への関心をもっと深め、観察する力も育てられるのではないかと思い、身近にいる生き物の飼育をしたいと考えた。



〈クラスの様子〉

ある日、園庭からかたつむりを見つけてきた子がいた。かたつむりの歌も歌っていたので、みんな『みせて、みせて!』と大騒ぎとなった。そこで保育室で飼育することにした。次に子どもたちが見つけてきたのはカエル。『カエルも飼う!』と予想通りの子どもたちの反応だった。生き物を飼育することに関心を持ち始めた。

〈保育者の対応〉

クラスで飼育が出来るように虫かごを用意した。また、エサなどについて子どもたちが関心を持ちやすいように話しをし、生き物の知識を持てるような声掛けを意識した。

〈クラスの変化〉

何を食べるんだろうね?と子ども達に問いかけてみた。すると日ごろ、室内遊びが好きで虫にもあまり関心を示さなかったB子がキャベツの葉っぱが入れてあることに気づき、『はっぱじゃない?』と話す。「へえー、そっか。じゃあ、葉っぱを入れてあげようね。」とB子の気づきに共感し、「じゃあカエルさんは?」とさらに問いかけてみる。『えー?』と言いながらも、なにやら考えている様子の子も、虫が好きの子も、室内遊びが好きの子も、カエルは何を食べるんだろうと興味をもっている。すると、一緒にあそんでいた隣のクラスの保育者に「生きているハエだよ。」と教えてもらった。

その日からハエや生きている虫をみつけると『いた！』『ころさないでね。』と保育者に教えに来る子ども達。捕まえたハエを虫かごに入れると、カエルが食べるかどうか様子を飽きずにじっと見つめていた。また、かたつむりも『なんかぼつぼつある』『うんちかなー！』と、毎日飽きずに生き物の観察を続ける子ども達だった。

やがて、虫好きな子ども達にと保護者からカブトムシのオス 2 匹メス 1 匹をいただいた。さっそく子ども達から『ゼリー食べるんだよ。』と声があがり、飼育することにする。すぐに『さわりたい！』と怖がらずに手を伸ばす子、さわっている子を憧れのまなざしで見つめ、“さわりたい”、“でもこわい”と揺れ動く子もいた。

どの子も虫に夢中になり、登園すると『むしさがし、いこー！』と外に飛び出していくようになった。また、捕まえた虫を『おいてきた。』と、逃がしてあげる優しさも育った。

〈考察〉

虫探しを通し、虫の様子を見たり保育者に聞いたりエサの心配をしたりと虫への興味関心を高めることができた。その中で虫に触れなかった子が触れるようになったり、言葉少なだった子がみんなの前でも言葉を発したりと個々の成長も見られた。





実践Ⅲ. 雪遊び

〈クラスの様子〉

冬になり寒くなると大好きな虫の姿が見えなくなる。再び外に出たがらなくなった子ども達。寒いのを嫌がり、厚着の子も増えてきた。「雪遊びは楽しいよ。」「外に行くよー」と声をかけると、『さむいー。』『やだー。』と言う子がいたり、スキーウェアに着替えるのを嫌がる姿があった。

雪が降ると、外で遊ぶのが好きな子は登園してすぐに『そとであそぶの?』とウキウキして聞いてくる。戸外であそぶのが苦手な子はせっかく着替えて外に出ても『てぶくろに、ゆきがはいった。』『つめたーい。』と言って短い時間で部屋に入ってしまう。

〈保育者の対応〉

身体にあったスキーウェアや手袋、帽子、長靴等寒くないような防寒着の準備をしていただくようお家の人にも声をかけた。長い時間外であそべるように外に出る前に子どもたちの服装のチェックを行い、寒くならないようにしながら、外に出るように心掛けた。

できるだけ雪に触れてあそべるように、色水を使ったかき氷屋さんや、大きな雪だるま作り、そりに乗せてあげるなど、子どもが興味をもてるよう保育者も身体をたくさん動かしながら、一緒に楽しくあそぶことを心掛けた。

〈クラスの変化〉

色水を雪にかけてみせると『わー、きれい。』『おいしそう。』と喜ぶ子どもたち。しかし、座っていると『さむい』と寒さを感じてしまい、室内に入りたがり、長くあそぶことはできなかった。

雪だるま作りや、そりあそびでは、保育者が作ってあげる、引っ張ってあげるために「順番にね」「待っててね」となることが多く、身体を動かすことが少なく、やはり長くはあそべなかった。

〈考察〉

保育者が主体となってあそぶことで、大きな雪だるまや色水など視覚的に興味をひくものを用意したが、自分たちであそぶ姿にはつながらず、長い時間楽しんであそぶことが難しかった。

保育参加日が近いということもあり、親子であそべばもっと楽しくあそぶことができるのではないかと考え、保育参加日に雪あそびを計画した。





〈クラスの様子〉

保育参加日にお家の人と一緒に雪遊びすることを話すと『わあー、やったー。』と喜ぶ子たちが多かった。そりすべり、宝探し、雪だるま作りなど、内容を話すと、『明日やるの?』『雪だるまつくるの?』などと聞いてくる子も増え、期待が高まってきているのを感じた。

〈保育者の対応〉

保護者もやったことのあるようなあそびを計画するとともに、宝探しで持ち帰れるプレゼントを用意し、「何がでてくるかお楽しみにね。」と期待を高めるようにした。前日に、氷をつくろうと話すと、とても喜び寒い中でも袋に水を入れるのをはりきり、『おかあさんにみせる。』『これ、ぼくの。』『わたしの。』と嬉しそうにしていた。

〈クラスの変化〉

当日は天候もよく、子どもたちもお家の人と一緒にということもあり、笑顔いっぱい最後まで楽しんでた。保護者の方は最初、外での活動ということで抵抗があった方もいたようだったが、実際にやってみて『とっても楽しかった。』『久しぶりに雪遊びをしました。』という声がかかれた。『家ではなかなか外であそぶことをしないのでいい機会でした。』という声も聞かれ、

家でもできたらやってみたくて話してくれる方もいた。

その後、子どもたちもあまり外あそびをいやがらなくなったように感じた。

〈考察〉

やはり、大好きなお父さん、お母さんと一緒ということで夢中で遊ぶ姿が見られ嬉しかった。保育参加日で、夢中で雪あそびを楽しむことができたため、クラスでも雪遊びを再度楽しみたいと考えたが、雪がみるみる解けてしまい、活動が出来なかったのが残念だった。

保護者の中には外での活動で気乗りしない姿も見られたものの、活動後には楽しかったという感想をいただいた。やはり、最近の子どもたちは家庭でも外で遊ぶ機会が減っているのを実感し、家庭にも外あそびの楽しさや大切さを伝えていく必要があるのではないかと感じた。





8 研究の成果と課題

虫探しや飼育を通し、観察することの楽しさの土台を育てることができた。また、それをきっかけに外であそぶ楽しさを感じ、外に出てあそぶ子が増えたことを嬉しく思っている。虫探しは子ども達にも保育者にも楽しいと思える活動になり、今年度から担任になった保育者との信頼関係を築くきっかけにもなった。また、友だち同士でのやりとりが見られるようになるなど人間関係も広がった。子ども達にとって虫探しは、保育者に自分の思いや気づきを受け止めてもらう時間であり、その喜びや満足感が保育者との信頼関係を築き、戸外へ元気に飛び出していくエネルギーになったのではないかと考える。

寒くなり、再び、戸外でのあそびをどのように進めていくか悩み、雪遊びの実践を行った。保護者も巻き込んであそびを進めたことで子ども達が寒さにも負けず雪遊びを楽しむ経験ができたことや保護者から、外であそぶことが少ない実情を聞くことができたことが成果と言える。

今後の課題としては、来年度も引き続き虫探しを深めながら新たに外に出て全身を使ってあそぶあそびを探しながら外あそびの楽しさを伝えていきたい。また、家庭でも外あそびが少なくなっている現状に対し、園で外あそびの楽しさを十分に感じさせることと、家庭に外あそびの大切さや楽しさを伝えていくことだと考えている。

*引用文献、参考文献

- ・保育所保育指針
- ・新訂0・1・2歳児の指導計画 尾崎 勲 監修 高橋保子 著